

[特別活動]

心許し合える学級集団に向けた取組

- 「元気はつらつ朝の会」を通して -

長澤 虎幸*

1 問題の所在

(1) 今日の課題から

新潟県教育庁義務教育課が発行した「平成24年度学校教育の重点」には、重点事項の中に「豊かな人間性と社会性を育む教育の推進」が掲げられている。その背景には、いじめの認知件数や不登校の児童生徒数が依然として高い数値を示している問題がある。これらの生徒指導上の諸問題の発生要因の一つとして、人間関係の希薄化が指摘されている。

その根源的な解決を図るため、学校では、教育活動全体を通じて、自己有用感やコミュニケーション能力の育成、よりよい人間関係の構築、自己指導能力の育成に努めるとともに、自分の考えを表現する機会を充実したり、児童生徒が互いに関わり合う喜びを実感できる集団作りに努めたりすることが重要であると述べられている。

これらを実現するためには、学校生活の基盤といえる学級における役割は極めて大きい。豊かな人間性と社会性を育むためには、児童生徒が誰とでも心許しかかわり合うことのできる学級集団が不可欠である。

(2) 児童の実態から

当校は、全校児童約90名の小規模校である。地区には、一つの幼稚園があり、小学校に入学するほとんどの児童がその園に在籍している。そして、小学校入学時に2つに分かれ、中学校で再び一緒になる。よって、児童は12年間ほぼ変わらない人間関係の中で過ごすこととなる。

学級担任をしている6学年の児童は、男子12名、女子7名、計19名である。この春から担任をしている。素直な子が多く、自らの課題に向かって一生懸命努力する姿が見られる。児童の人間関係については、大きなトラブルもなく、温厚な関係である。しかし、自ら問題や課題を見つけ、よりよくしようと自分から行動することは少ない。また、話し合いのときは、決まった児童による発言が多く、出された意見に自分の考えをゆだねることがしばしば見られ、全体的に受け身な姿勢が強い。

5月に調査したQ-U (Questionnaire-Utilities楽しい学校生活を送るためのアンケート) の居心地のよいクラスにするためのアンケートの結果は、学級満足群18名：95% (全国平均38%)、非承認群1名：5% (全国平均18%)であった。また、やる気のあるクラスをつくるためのアンケートでは、友達関係11.5P (全国平均9.5P)、学習意欲10.5P (全国平均9P)、学級の雰囲気11.5P (全国平均9.2P)であった。全国平均と比べても全体的に良好な結果となった。しかし、質問項目を詳しく調べてみると、「授業中に、先生の質問に答えたり、自分の考えや意見を言ったりするのは好きである」の項目について、平均点が極端に低いことが分かった。普段の授業の様子や成績を見ている限り、学力面からくるものではなく、また、少人数の学級のため、発表経験が不足しているとも考えにくい。

その要因の一つとして考えたことが、学級の人間関係である。児童は、9年間、あまり変化のない人間関係の中で過ごしている。自分の周りの友達が、お互いにどんな特性をもち、どんな性格が分かり合っている。人間関係が良好な場合は、気が知れてより深い人間関係が築くことができるであろう。しかし、人間関係が悪化した場合は、適度な距離を保つことができず、相手に対する偏見や思い込みが肥大していく危険がある。そのような場合、自分の気の合う友達とのみ付き合うようになり、人間関係は固定化していく。

その人間関係の固定化が、学級の中で見られるときがあった。ある児童は、いつも特定の友達と行動を共にして、その友達以外とはほとんど話すことがなく1日を過ごしていた。また、学級の全員で円座になって話し合う時、毎回となり合う友達がほとんど同じであった。Q-Uの結果から見れば、クラスが一見安定しているようだが、実は特定の友達

* 妙高市立妙高高原南小学校

と良好な関係なだけで、心許し合える学級集団ではないと考えるようになった。前述の質問項目の点数が低いことについても、周囲の反応を恐れて、自分の意思を表現できないからだと考えた。

このような固定化された人間関係の中では、児童の人間関係は広がらず、豊かな心や社会性を育む機会も奪われることにつながる。よって、この固定化された人間関係を解き放ち、自分らしく誰とでも心許してかかわることができる学級集団の育成が重要となる。

(3) 先行研究から

田原朋子(2006)は、望ましい人間関係を築いていくためには、体験的な活動が有効であるということ述べていた。また、岡沢雅子(2008)は、田原の研究を受けて、体験的な活動の中にグループワークを意図的・計画的に取り組むことが人間関係をスムーズにしていく上で効果的であるということを示した。そして、岩島亜希子(2012)は、学級活動(1)の「学級や学校の生活づくり」の話し合いによって、児童の学級への参加意識が高まったと述べていた。

3者の研究から、望ましい人間関係を築いていくためには、意図的・計画的にグループワークを取り入れた体験活動を行うことが有効であり、また、学級づくりの話し合いを中核にすることによって、学級経営の集団作りや人間関係作りが充実していくことが分かった。

そこで、本研究では、学級目標を実現するための学級活動の話し合いをもとに、児童が自発的・体験的な活動を仲間とともに取り組んでいくことで、心許し合える人間関係に向けて固定化された人間関係がどのように変化をしていったか検証していく。

2 研究の目的

人間関係の固定化が見られる学級集団が、学級目標の実現に向けた対策である「元気はつらつ朝の会」という協同活動を行うことで、心許し合う学級集団に向けてどのように変容していったか考察する。

3 研究の方法

(1) 学級目標からのアプローチ

① 学級目標作り

ただの人の集まりと言える集団が、お互いに高め合い、協力し合う集団となるためには、共通の目的が必要となる。学級において、その目的となるものが学級目標だと私はとらえている。よって、新年度に入ってから行う学級目標作りでは、学級の現状を踏まえた上で、理想とする学級像を学級全員で練り上げていく。

② 重点目標作成

学級目標の実現に向けて、PDCAサイクルを活用する。そのC(チェック)とA(アクション)として、行事等で学級目標の達成状況を振り返る。また、2学期の初めには、P(プラン)として2学期の重点目標とその対策を検討する。

(2) 「元気はつらつ朝の会」の実施

① 内容構成

担任と児童による話し合いで、2学期重点目標の対策の一つに「朝の会パワーアップ」が提案された。これまでの朝の会は、教師が提示した「あいさつ、健康観察、朝の歌、連絡」という必要最低限の内容であった。「元気に明るく一日スタート」「笑顔満開」というねらいに合った朝の会になるように内容構成を考える。

② イメージ作り

「元気に明るく一日スタート」「笑顔満開」というねらいに合った朝の会のイメージを作るため、『本気の朝礼 繁盛店のチームづくり』というDVDを紹介する。児童は、映像に出てくる店員の活気ある朝礼の雰囲気を間接的に経験することで、自分たちの行う朝の会のイメージを作ることができると考える。

③ 主体的な行動を促すシステム作り

日直となった児童が主体的に行動できるよう、マニュアル通りではなく、その子らしさがでる内容構成にする。そうすることで、児童自らが学級に働きかけようとする意欲を高めるとともに、児童同士のつながりを作る。

4 実践の概要

(1) 学級目標からのアプローチ

① 担任の願い

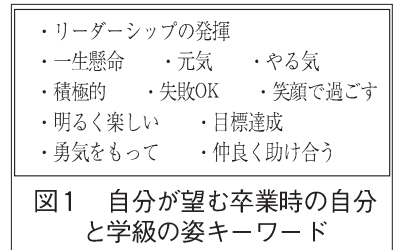
4月、児童との出会いの場で、担任の願いである「学級の全員が、毎日なんとなくいい気分で過ごすとともに、サイ

コーな瞬間をたくさん味わう1年間にしよう。」という思いを伝えた。そして、その願いを達成するために、心がけてほしいこととして「自分で自分の成長を願い、行動する」「仲間とともに、喜びを分かち合う」「元気に明るく前向きに」を、許せないこととして「自分や他人を傷つける」「他人をバカにする」「うそをつく」を伝えた。

学級の中では、児童にとって担任が最大の環境となる。年度当初に担任の願いを伝えることで、学級の中に暗黙のルールが作られ、そのルールが土台となって学級の雰囲気や環境が作られていく。心許し合える学級集団には、担任の願いが重要な要素の一つになっていると考える。

② 学級目標作り

学級目標作りの前に、児童の個人目標を作成した。それは、児童一人一人の人権を尊重し、個人を大切にしたい学級経営を心掛けているからである。学級は、違った個性の児童が集まってできた集団である。その個人が尊重される集団でなければならぬと考える。よって、学級のために個人が自己犠牲となるようなことは避けたい。そのため、児童一人一人の願いや意志を明確にした上で、学級目標作りを行った。



学級目標作りでは、まず、学級の現状を見つめるため、5年生での姿を振り返り、学級のよいところと課題について話し合った。そして、自分が望む卒業時の自分の姿と学級の姿(図1)を出し合った。

意見を整理するため、児童に「この中で特に大切にしたいことは何か。」と発問をしたが、児童同士の価値観の違いでまとめることが難しかった。そのとき、ある児童が「どの考えも、最後には必ず笑顔に向かっていく。」という発言があり、それに対して周りの児童からどよめきが起った。



最終的に「笑顔満開」という学級目標が決まった。学級全員の思いが込められた学級目標が完成した。

③ 重点目標の作成

学級目標の達成状況について、行事等の機会に学級全体で振り返りを行っている。1学期では、主に運動会と修学旅行で実施した。修学旅行の後の「笑顔満開アンケート」(学級のよいところと課題を記入するアンケート)では、よいところとして「礼儀正しい、あいさつ、明るい雰囲気、元気、言われたことはできる」、課題として「男女の間のかべ、悪口、人任せ、前が出る人が同じ、行動が遅い、あいさつ、意見が出ない」という意見が出てきた。人間関係についての記述が多く見られた。その後、アンケートの結果を児童に伝えたが、担任が見取る限りで行動の変化は見られなかった。人間関係について問題意識はあるものの、その関係を崩すことは、大変難しい状況にあることが推測された。

そこで、2学期の初めに、1学期末に書いた学級についての振り返りの作文をもとにして、2学期の重点目標の作成を行った。その際、意見が集中したのは、「男女の仲が悪い」「積極性がない」「悪口」「話の聞き方」の4点の課題であった。やはり児童は人間関係について高い問題意識をもっていた。

その話し合いの場で、児童に固定化されている人間関係の実情に目を向けてほしいと思い、「なぜ積極的になれないのだろうか。」と学級全体に発問した。すると、ある児童が声を震わせながら発言した。「みんなの前で、発言するのが怖いです。どう思われているのか心配です。一人ぼっちのような気持ちになります。」教室は静まり返り、周りの児童は考え深い表情を浮かべていた。誰もがその児童と同じことを感じていたようだった。その発言がきっかけとなって、積極性をはじめとする学級の課題解決には、「やり手ではなく、受け手が変わる」ことを学級全体で共通理解できた。

2学期の重点目標は、「Hotto Motto 反応」に決まった。受け手がHotto(温かい)反応をMotto(たくさん)にしていこうという意味が込められている。その後、重点目標達成に向けて、4つの対策「①朝の会パワーアップ(元気に明るく1日スタート、気持ちのよいあいさつ)②授業中に自分の意見を表す、反応する(自分の気持ちを伝える、伝えたい気持ちを受け止める)③日常生活でプラスの言葉を使う(悪口やきつい言葉ではなく、心温まる言葉をかけ合う)④いじめや差別など人権について考える(男女をはじめ特性の違いを知るとともに、その違いを認め合う)」を立てた。

(2) 「元気はつらつ朝の会」の実施

① 内容構成

2学期の重点目標の対策の一つである「朝の会パワーアップ」についての話し合いを行った。その際、元気で明るい朝の会のイメージが作れるよう関東近郊でチェーン展開する居酒屋の朝礼の映像を紹介した。その後、児童に目指す朝の会のイメージや内容構成についての聞き取りを行った。その朝礼を参考にして、朝の会のアイデアがたくさん出てき

た。それらを踏まえて、担任が内容構成を考え、「元気はつらつ朝の会」として提示し、児童に賛同を得て決定した。

<p>1 あいさつ</p> <p>① 日直「全員起立」(素早く行動) 「目を閉じて準備をします」</p> <p>② 日直「目を開けて」 「これから元気はつらつ朝の会を行います」</p> <p>③ 全員「オス」</p> <p>④ 日直「元気にいきます」</p> <p>⑤ 全員「オス」</p> <p>⑥ 日直「おはようございます」</p> <p>⑦ 全員 (繰り返す)</p> <p>⑧ 日直「ありがとうございます」</p> <p>⑨ 全員 (繰り返す)</p> <p>⑩ 日直「妙南サイコー」</p> <p>⑪ 全員 (繰り返す)</p> <p>⑫ 日直「6年サイコー」</p> <p>⑬ 全員 (繰り返す)</p> <p>⑭ 全員「(日直の名前)サイコー」</p> <p>⑮ 日直「サンキューみんな」</p> <p>⑯ 日直「みんなサイコー」</p> <p>⑰ 全員「サンキュー(日直の名前)」</p> <p>⑱ 日直「笑顔満開」</p> <p>⑲ 全員 (繰り返す)</p> <p>⑳ 全員「イエーイ」 その後、近くの友達とハイタッチ</p>
--

<p>2 健康観察</p> <p>日直「健康観察をします。」</p> <p>日直「〇〇がサイコーな〇〇です。」 「元気です。」 → 全員「イエーイ」(ジェスチャー付) 「具合が悪いです。」 → 全員「オー」(ジェスチャー付)</p> <p>※その後、日直から名簿順で全員が発言する。</p>
--

<p>3 スピーチ</p> <p>日直「スピーチを行います。」</p> <p>日直「〇〇について話します。」</p> <p>※内容は、がんばっていること、大切にしていること、普段感じていること、考えていること、自分の夢など、自分のことを学級の友達に自己表出する場とする。</p>
--

<p>4 声だし</p> <p>日直「声だしです。今日は〇〇です。」</p> <p>※内容は、今月の歌、音読、暗唱等を行う。</p>

- 1 あいさつのねらい**
- ①～⑳：短く歯切れのよいかけ声で、テンポよく行い、リズムを作る。全員が声を合わせることで、一体感を作る。
 - ①～⑳：大きな声を出し、自己表出の抵抗感を和らげる。
 - ①～⑳：失敗や間違いは、周りが全力でフォローする。安全欲求が満たされる雰囲気を作る。
 - ①：緊張感ある雰囲気を作るため、素早い行動を行う。
 - ①：気持ちを集中させるため、目を閉じて静の時間を作る。
 - ⑩～⑰：「〇〇サイコー」というかけ声を繰り返すことで、自分や友達の自己肯定感の向上をねらう。
 - ⑭、⑰：日直の名前を取り入れることで、日直の自己肯定感の向上をねらう。また、学級のために働く日直の魅力を作る。
 - ⑱：学級目標「笑顔満開」を最後に声を合わせて言うことで、毎日、学級目標を意識して生活できるようにする。
 - ⑳：あいさつの最後のしめにハイタッチを行う。身体的なコミュニケーションで、より親密な関係を作る。

【実際の様子】

最初の頃は、リズムが取れず恥ずかしそうな児童もいたが、経験を重ねる中で、声が出てきた。しかし、最後のハイタッチは、やりにくそうにしている児童もあり、抵抗感が見られた。

- 2 健康観察のねらい**
- 健康観察の際に、「〇〇がサイコーの(名前)です。」と自己紹介を行う。自己開示・自己表出を行う場とするとともに、それを全員で承認して、安心して自分を語れる場を作る。

【実際の様子】

「ラーメンサイコーの〇〇です。」「野球サイコーの〇〇です。」など自分の趣味や特技などを発表していた。友達予想もしない発言に、笑い声が沸き起こることがよくあった。

- 3 スピーチのねらい**
- 日直が、自分のがんばっていることや夢などを語る。総合的な学習の時間のキャリア教育の視点から、自己実現に向けて、主体的に行動する場ととらえる。また、それを全員で受け止め、安心して話せる雰囲気作りを行う。

【実際の様子】

日直は、がんばっていることを堂々と語っていた。スピーチの後には、友達から盛大な拍手が送られ、温かい雰囲気に包まれていた。日直の役割を果たそうとする姿が、周りの友達の反応につながっていったと考える。

- 4 声だしのねらい**
- 全員で声を合わせることで、一体感を作る。

【実際の様子】

あいさつで声を出していることもあり、以前よりも歌を歌う声や暗唱の声が大きくなった。

5 しめ

日直「これで朝の会を終わります。」「日直の一言(例) 今日も元気はつらつ、笑顔満開でがんばりましょう。」
全員 (拍手)

5 しめのねらい

- 日直が最後に言葉を投げかけ、全員がそれを温かく見守り、大きな拍手を送る。

【実際の様子】

温かい雰囲気の中、朝の会が終わるようになった。

② イメージ作り

元気で明るい朝の会がイメージしやすいように、関東近郊で居酒屋チェーンを展開する居酒屋「てっぺん」の朝礼のDVD映像を児童に見せた。その居酒屋の朝礼は、3つの内容「スピーチ訓練」「NO.1宣言」「あいさつ訓練」で構成されており、その目的は、「①スタッフ全員の元気を全開にして、やる気を引き出す。②互いにプラスの言葉を口にして、店中にプラスの空気を充満させる。③一人一人が本気をぶつけ、チームとしての一体感を高める。」である。

児童はその映像に大きな刺激を受けていた。その刺激によって、朝の会への意欲が高まり、朝の会パワーアップのねらいを踏まえた上で、朝礼の内容を参考に自分たちの朝の会のアイデアを楽しみながら考えることができた。

③ 主体的な行動を促すシステム作り

元気はつらつ朝の会において、日直の役割はたいへん重要である。しかし、日直の仕事は、当番活動の意味合いが強く、自発的な活動となりにくい。そこで、児童が主体的に日直に取り組むように、立候補またはその日の日直が次の日直を指名するシステムにした。また、司会のマンネリ化を防ぐため、内容構成の中にスピーチや日直と全員との掛け合いの場面を取り入れた。日直になった児童は、前日からスピーチの内容を考えるなど、日直に対する意識が高まった。また、児童がオリジナリティーを発揮する場面を作ったことで、自己表出することへの抵抗感が少なくなるとともに、学級全体で友達の言葉に対して興味をもって聞く態度や雰囲気が作られていった。

5 研究の成果と考察

(1) 児童の姿より

日直になった児童は、学級全員の前に立ち、緊張しながらも、大きな声であいさつをしたり、自分の夢を語ったりする姿が見られた。その懸命な姿を見て、他の児童は大きな拍手を返したり、声をかけてサポートしたりしていた。それは、友達を受け止め、学級全体で一つの目的に向かっていく姿だととらえられる。

また、その後、全員で円座になって話し合うときに、依然として、男女が分かれて、仲の良い友達同士で隣り合って座ることがあった。その時、担任としての思いを伝えたことがあった。「友達と心のバリアを作ったのは自分であり、それを解かすのも自分。元気はつらつ朝の会で学級の雰囲気が変わっていったように、行動を変えればバリアは解けていくはず。」それをきっかけに、友達との距離の取り方を変える児童が出てきた。その後、昼休みに学級で流行っていた「Sケン」という遊びを男女で声をかけ合って一緒に遊ぶことがあった。担任の働きかけが、児童の行動に結びついたのは、児童が固定化された人間関係をどうにか変えたいと思っていたからだと考える。その人間関係を変えようとする雰囲気は、朝の会の場面から、次第に授業や日常生活へと広まっていった。

(2) 作文より

「元気はつらつ朝の会」を実施してから3週間後に自分や学級で変わったところを作文にして書いた。

【A児の作文】

僕が元気はつらつ朝の会をして変わったと思うことは、クラスのあいさつがすごくよくなってきていることだ。人より先にあいさつをしているし、元気がいい。これは、朝の会をしたからだと思う。クラスもいい雰囲気だと思う。自分も変わった。「元気はつらつ朝の会」をして元気に一日過ごせるようになった。いい朝の会だと思う。

A児は、以前、仲の良い友達といるときとそうでないときに表情が全く違っていった。しかし、作文に書いたように、「元気はつらつ朝の会」がきっかけとなり、人より先にあいさつをするという行動の変化が現れた。また、固定化した人間関係といえる特定の児童中心のつきあい方から、交流の範囲を広げ、他の友達とかかわりを求めるようになった。

【B児の作文】

元気はつらつ朝の会は、とても元気が出るし、体もあたたかくなってすごくいいと思う。朝、ねむくてダラッと



写真2 元気はつらつ朝の会の健康観察の場面

していても、シャキッとスイッチが入ったような気がした。日直の人を拍手で盛り上げて、みんな笑顔になれる。本当に楽しくて、笑顔になれる朝の会だと思う。これが毎日続けば、「笑顔満開」にもっと近づけると思う。

B児は、自己表出が苦手な児童である。「元気はつらつ朝の会」を初めて1週間ぐらいに、総合学習で友達の特徴（よいところ）を書き合う活動を行った。B児は、その日の自主学習で再度、学級全員についての特徴を書いてきた。一人一人を思い浮かべて、時間をかけて書いてきたようだった。そのときの感想には「一人一人短所もあって、短所ばかり気になってしまうことがあるけど、こういうふうがいいところを見つけると優しい気持ちになれるし楽しいです。」と書いていた。B児の行動は、人間関係の固定化の要因ともいえる友達に対する偏見を打ち破り、新たな関係を築こうとしている姿だと考える。

その他の児童については、右の表1の通りである。A児、B児をはじめ、友達に対する見方やかかわり方に変化が見られた。

(3) 朝の会アンケートより

「元気はつらつ朝の会」を実施する前と3週間後にアンケートを行った。1・2の項目は、1点：とてもそう思う、2点：ややそう思う、3点：ややそう思わない、4点：そう思わないの得点の学級平均で算出している。3の項目は、学級の自分を除いた人数である18人での平均人数である。

表2の通り「朝から元気に活動することができますか」「学級全体に話すことが好きですか」の項目が向上した。また、学級の中で話せる人の人数も増加している。朝の会をきっかけに交流関係の広まりが出てきたことが分かる。

自分の変化	元気になった 5人	すっきりした気持ち 3人
	明日はもっとよくしたい 3人	積極的になった 2人
学級の変化	あいさつがよくなった 2人	楽しみ 2人
	やる気が上がった 1人	
	雰囲気よくなった 9人	元気になった 2人
	あいさつがよくなった 2人	信頼感が上がった 1人
	学級目標が実現できそう 1人	声が大きくなった 1人
	笑顔が増えた 1人	重点目標が実現できそう 1人
	成長している 1人	友達のことをよく知る 1人

質問事項	事前	3週間後
1 朝から元気に活動することができますか。	2.16P	1.05P (↑1.11P)
2 あなたは、学級全体に話すことは好きですか。	2.10P	1.58P (↑0.52P)
3 学級の中に、話せる人は、何人いますか。	14.3人	17.2人 (↑2.9人)

6 今後の課題

学級全体の雰囲気や児童の人間関係に関する意識に変化が見られ、心許し合える学級集団になりたいと願う気持ちが見られるようになってきている。しかし、その思いが日常生活の中で顕著に行動となって現れるまでに至っていない。また、アンケート結果にあるように未だ話すことのできない固定化された人間関係が残っているところもある。それは、友達との交流場面で心を許し合う体験が十分に行われていないからだと考える。今後は、構成的グループエンカウンターやプロジェクトアドベンチャーを実施したり、学習場面で学び合いの場を設定したりして、心を許し合う交流体験をさらに積み重ねていきたい。

そして、今後、その心許し合える人間関係は、教師が設定した場面だけでなく、日常生活の場面で発揮されていかなければならない。そうなれば、子どもにとってすべてが安心できる状況とは限らない。ときには、友達の言動に傷ついたり、逆に傷つけてしまったりすることがあるかもしれない。そのような場合でも、それを失敗ととらえるのではなく、児童にとって豊かな人間性や社会性の育成のチャンスとなるよう、きめ細かな生徒指導や教育相談の充実を図っていく。

今後も「元気はつらつ朝の会」をはじめ、学級目標達成に向けた様々な取組の中で、心許し合える学級集団をつくり、学級全員が笑顔満開で卒業式を迎えられるよう、児童とともに自分のできることをしっかりと取り組んでいく。

引用・参考文献

- 1) 岩島亜紀子 2012 「学級活動(1)の話合い活動を中核にした学級経営」『教育実践研究』第22集
- 2) 岩瀬直樹 『クラスづくりの極意』農山漁村文化協会、2011年
- 3) 岡沢雅子 2008 「学級におけるよりよい人間関係づくりをめざした取組」『教育実践研究』第18集
- 4) 金大竜 『日本一ハッピーなクラスづくり方』明治図書出版株式会社、2012年
- 5) 田原朋子 2006 「望ましい人間関係とルール・マナーの定着を目指した学級集団の育成」『教育実践研究』第16集
- 6) 日経レストランDVD 『本気の朝礼』日経BP社、2005年
- 7) 新潟県教育庁義務教育課 「平成24年度 学校教育の重点」2012年